

令和7年度中国・南昌市への青少年訪問団派遣事業 事後報告書

◆名前： 真部 いゆ

江西省及び南昌市に滞在中の様子や本事業で得たこと、感想等をご記入ください。

(1, 000字程度)

高松市青少年訪問団の一員として、中国江西省南昌市を訪れた。初めての海外、もちろん初めての南昌。文化や空気の違いに戸惑いながらも、多くの発見と出会いがあった。

印象的だったのは、二日目の夜に行われた中日青年友好交流大会。ホテルの宴会場で円卓料理を囲みながら、日中双方計12チームがステージ発表を行った。私たちはソーラン節と、日中の流行曲をつないだダンスメドレーを披露した。中盤の出番だったこともあり、会場は料理に夢中で少し静かだった。けれど、中国で流行っているナルトダンスが始まった瞬間、「お～！」というどよめきが広がり、一気に視線が集まった。動画を撮ってくれる人までいて、とても嬉しかった。文化が通じた瞬間だった。

景德鎮の陶器市場でも、似たような場面があった。買い物中、「Where are you from?」と英語で聞かれ、「Japan」と答えたが、通じなかったようで相手は困り顔。すると、隣にいた仲間が「Ribēn」と中国語で伝えてくれた。店の人の顔がぱっと笑顔に変わり、「2人ともかわいい」「(来てくれて) ありがとう」などと、日本語で声をかけてくれた。言葉が通じた爽快感と、母国語で話しかけてもらえたときのふわっとした温かさが、場の空気をやわらげた。

翻訳アプリの精度も高まった現在、言葉や流行を知らなくても困らない。けれど、知っていれば関係を深めるきっかけになる。次に海外へ行くときは、数単語でも現地の言葉を覚え、少しでもその国の流行を調べてから出発したい。

一方で、常識の違いは、知らないと本当に困る場面が多い。歩行者優先の感覚で道を渡ってしまい、クラクションを鳴らされた。トイレトペーパーは流していいのかわからなかった。慣れないキャッシュレス決済に手間取り、セルフレジを長時間ふさいでしまった。いろいろ迷惑をかけてしまった。それでも、轢かずに止まってくれた人がいた。車優先だと教えてくれた人がいた。最後まで手伝ってくれた店員さんがいた。その寛容さと、さりげない手助けに、私は救われた。

この事業の中で「日中の懸け橋になってほしい」と言われることが何度かあった。大きなことはできないけれど、迎える側になったとき、同じように行動するだけで、小さな懸け橋にはなれる。まずは寛容であること。そして、必要な常識は優しく伝えること。そうすることで、余計な摩擦を減らし、本当の意味での懸け橋になれると思う。

帰りのマリンライナーの中で、ふと南昌行きの航空券を検索してみた。思ったよりも安い。少し中国語を勉強して、お金もいくらかためて。近いうちにもう一回行ってみようと思う。